

ドイツ体育連盟における女性体育家の 会員権容認の経緯に関する研究

成 田 十次郎

Study on the Process of Admission of Women Gymnasts' Membership in the German Physical Education Federation

Jujiro NARITA

The aim of this paper is to verify the process in which the German women gymnasts won their membership in the German Physical Education Federation (Deutsche Turnerschaft) in relation to the general problems of women's physical education in Germany.

In order to achieve this aim, the following matters were researched.

1. The development of women's physical education in the German Physical Education Federation.
2. Controversies between supporters and opponents in the German Physical Education Federation.
3. The problems of women's physical education in the transition from 19. to 20. century.
4. Admission of membership of women gymnasts by the German Physical Education Federation.

はじめに

この論稿のねらいは、ドイツ体育連盟における女性体育家の会員権が、どのような経緯で容認されたかを明らかにすることにある。その際、女性の会員権は当時の女性の体育がかかえていた諸問題の中の一つの重要な問題であったので、それらの諸問題との関連で明らかにする必要がある。

この種の研究は、これまで近代体育といわれてきたものが、いわゆる「男性の体育」とでもいうべき性質を強くもっていたのではないかという問題の一端を明らかにし、女性の本性に基づく女性の体育の確立を検討する上で、意義を有するといえよう。

また、女性の社会的自立という時代の要請をうけて、女性の体育の歴史的研究が急速に進められているにもかかわらず、この種の研究がまだなされていないという点からも、研究の意義が認められよう。

1. ドイツ体育連盟における女性体育の台頭

1860年代初頭に設立された女性の体育組織がすぐに消え、女性の体育に対する関心が下火になっ

た後、ドイツの体育会において、学齢期を過ぎた女性の体育が本格的に論じられ、組織化が進められるようになるのは、1890年代に入ってからのことであった。

女性の体育促進運動は、まず1880年代の初めに、民衆学校の女兒及び女学校の女兒・女生徒のための必修教科体育導入運動から始められている⁽¹⁾。

そして、1880年代の末から1890年代の初めにかけて、体育会の女性部会や女性体育会の組織が、ドイツ各地に登場してくる。このような女性の体育組織の結成は、初期の段階においては、決して容易ではなかったようである。

首都ベルリンに設立された「ベルリン女性体育促進会」の設立事情は、この事実を示している⁽²⁾。

このベルリン女性体育会結成の希望は、1890年の春、ベルリンの北西モアビト地域の婦人達の間から芽生え、たちまち北西地区一帯の体育愛好婦人家達の替同を得て、この地区にある「グーツムーツ体育会」への、女性体育部会設立の働きかけに進んだ。しかし、女性体育愛好家の要請にもかかわらず、女性体育部会設立の問題は、グーツムーツ体育会では全く取上げられず、3年間無視され

たままであった。

そこで方針を変えた彼女達は、有力な体育指導者達に個別に接衝し、1893年5月、ようやく体育委員会の議題に、この問題を採用することに成功した。

結果は、28人の委員の中で、替成者8人という少数で否決された。

この提案を支持したグーツムーツ体育会体育部長エルフェルトは、女性体育部会の設立が金銭上の問題と男性に比べて女性の体育活動そのものに伴う不都合な問題とによって、グーツムーツ体育会で取上げされなかった事情をほのめかしており、委員会では多数の委員がいただいている女性の体育に対する偏見によって、女性体育部会の設立が否定されたと報告している。

このエルフェルトが指摘した委員の「偏見」に対しては、後日、体育会会長ウंकロットが『訂正文』を出して、委員達は「偏見」によって女性体育部会設置に反対したのではなく、「グーツムーツ体育会の大部分の人が、成人と徒弟と児童の体育で、今のところ十分手数がかかっており、婦人体育部の設置はさしあたって好ましくない。」と考えているからだと反論している。

後に指摘するように、当時女性の体育組織に対しては、会費や地位の問題とともに、女性の体育運動参加そのものに強い反対があった。グーツムーツ体育会の委員会は、それらを考慮して、女性体育部会の設置に消極的であったことは否定できない。エルフェルトが他の女性体育組織とはちがって、「正しい管理によって」この地区の婦人の体育を繁栄させねばならないとして、委員達を説得しているあたりに、そのことをうかがうことができる。

けっきょく、婦人体育愛好家達は、体育会への婦人体育部会設置を断念して、委員会会議の5日後、1893年6月4日に、独立した「女性体育促進会」設立の会合を開き、規約の草稿作成や事務的手続きについての諸決議を行った。

注目すべきことは、この女性体育会設立の会議が、グーツムーツ体育会の中の女性体育促進派の委員達によって開催されて、役員（委員）には、それらの男性が就任していることと、正会員は男性であって、この会の運営がそれらの男性の手によっていたことである。

作成された以下の規約からそのことがわかる。

1. 目的 規則正しい適切な体育運動、体育遊戯、体育遠足、歌唱によって、女性の心身を育成する。

2. 会員 正会員は満25歳以上で、入会金5マルクを納めた品行方正な男性とする。

3. 運営 この男性よりなる組織が会を運営し、事業をすすめる。

4. 施設建設 会の課題の一つは施設の建設にある。

5. 女性体育家（一般会員）の会費 会の目的に要する費用を負担するため、女性体育家は1マルクの入会金と毎月50ペニツヒを納める。

6. 体育指導 体育の指導は女性体育教師が担当し、体育部長（男性）と協力して、一切の体育に関する仕事を処理する。

7. 体育活動 体育活動はシュピース方式（集団指導）によって実施され、体力や技能による班別体育は実施されない。

一方、この時期にフランクフルト・アム・マインには、「女性体育会」（Frauenverein für Gymnastik）が設立されたが^{註3）}、それは男性体育教師の指導や非活動会員として男性の入会も認めてはいたが、委員会はすべて女性委員よりなり、運営は女性の手にあった。

以下の規約からそのことがわかる。

1. 目的 集団での活動を通して会員の健康を増進し、力を強め、運動の軽やかさや確かさを与える。

2. 運動 女性の体の特徴や健康と美の理論にかなった運動を選び、体育服装をつけて行う。

3. 指導 男性ないしは女性の教師が指導する。

5. 観客 通常の練習日（夜）には女性のみが許される。男性の医者や体育教師については、委員会が決める。

7. 会員 15歳以上の女性を活動会員とし、非活動会員には男性も女性も入会できる。

16. 正会員 投票権は18歳以上の活動会員に与えられる。

27) 委員会 会長、体育部長、書記、用具、登記の5人の女性によって構成される。

総会で保留されている事以外は、この委員会が一切を処理する。

この女性体育会が、ベルリンのそれとちがって、全く女性の手による女性の体育会であったのは、

その創設がこの地にもとから存在していた女性教師の体育会と関係があったことによるものと指摘されている。

すでに1890年代の前半、体育会の女性の体育は、後に述べる他の幾つかの主要な問題と並んで、広い関心を集めていたと考えられる。しかし、ドイツ体育連盟には、この問題に対応する体制が整備されていなかったようである。会長ゲッツの以下の要請文は、それらのことを示している。

ドイツ体育連盟

ドイツ体育連盟の図書館に、女性体育会や体育会女性体育部会の規約を求める声がかり返ってきている。その種のものはこの図書館にはないので、自分達の規約を作っている女性体育会や女性体育部会を持っている体育会の会長に、それを送付されるよう要請する。

.....

ライブチヒ＝リンデナウ1896年9月8日ドイツ体育連盟会長、F.ゲッツ博士^{※4)}

当時の体育会において、何が女性体育の問題であったのだろうか。1895年の『ドイツ体育誌』上の『体育会における女性の体育』と題する論文の中で、シュッツァーは1). 女性体育に対する偏見、2). 女性体育の指導者、3). 運動の種目と内容、4). 女性体育の組織、5). 女性体育家の遠出や体育祭への参加等の問題点を指摘している。そして、4)の組織に関しては、女性体育家に男性と同じ権利を与えるかどうかということ、5)の体育祭との関連では、公開演技に出場させるかどうかの問題を重視している。そして、前記の件は否定して、女性体育家を委員に入れて彼女らの声を聞くこと

を提案し、後記の件については地元で開かれる体育行事に限って肯定的見解を示している^{※5)}。

このシュッツァーが指摘した問題点やそれに対する見解は、これ以後15年間にわたってドイツ体育連盟の委員達によってくり返して討議され、中央見解として示される内容を、先取りしたものといってもよからう。

1896年のドイツ体育連盟中央委員会の会議においては、このような女性体育の組織化を背景にして、女性体育の問題が一応提出されているが、女性体育家の会員資格問題は、ゲッツの一言で否定され、僅かに、1894年の中央委員会会議に提出されていたが、問題にもされなかった女性体育家とその組織に関する調査・統計のみが認められることになった^{※6)}。

ともかく、以下の女性体育家の統計によってわれわれは女性体育家の数や組織が、それ以後ドイツ体育連盟の中で、急速に増加している事実を知ることができる。

すでに述べたように、会員権の問題とともに、当時の女性体育家の問題の一つは、体育祭への女性の参加をめぐる問題であった。

1860年に始まったドイツ体育祭の歴史の中で、1894年にプレスラウで開催された第8回祭典は、女性体育家が始めて公開演技に登場したことで、注目されるべき祭典であった。

これは、プレスラウの「古体育会」(Alter Turnverein)の女性体育部員による演技であったが、詳細な祭典報告記事の中でも触れられていないし、特に論議をひきおこしてはいないようである^{※7)}。

表1 ドイツ体育連盟における女性体育家の組織数及び人数の推移

調査年月日	D T加入 体育会数	14歳以上 の会員数	女性体育 部 会 数	女性の数	出 典 (D T Z)
1897.1.1	5,782	578,103	454	15,969	1897.Nr.31
1898.1.1	5,999	594,750	589	18,410	1898.Nr.29
1899.1.1	6,303	626,512	673	20,588	1899.Nr.28
1900.1.1	6,701	648,273	816	24,135	1900.Nr.30
1905.1.1	7,296	768,351	972	31,260	1905.Nr.30
1910.1.1	9,101	946,115	1,521	53,447	1910.Nr.30
1914.1.1	11,491	1,188,181	2,226	75,392	1914.Nr.30
1915.1.1	11,769	1,072,474	不 明	62,680	1915.Nr.36
1916.1.1	11,580	980,790	不 明	52,628	1916.Nr.3
1917.1.1	10,790	886,724	不 明	47,261	1917.Nr.3

女性の体育祭への参加と公開演技がドイツ体育連盟の中で公的に検討されるのは、1898年ハンブルク第9回ドイツ体育祭での、女性体育家による公開演技を直接の契機とするものであったとみられる。

この祭典には、外国の女性体育家とともに、地元ハンブルクとアルトナの体育会の女性体育家約1,000人が参加し、精力的に徒手・手具体操や輪舞だけでなく、器械体操を演技している^{※8)}。

これらの女性の体育活動に対しては、さまざまな評価が下されたようであるが、大会の報告者エルベスは「ハンブルクとアルトナの体育会の女性部、少女部、児童部による体育で、全観衆の祭典の喜びは最高潮に盛り上がった^{※9)}。」と述べている。

この評価は必ずしも誇張であったとはいえない。1899年のドイツ体育連盟の年次報告の中でも、女性の体育演技は同様に高く評価されているのである。

ハンブルクのドイツ体育祭は、児童・生徒の演技と少女・婦人の演技でも、偉大な業績をあげた。ことに少女・婦人の演技は単なる遊びやダンスではなく、器械での力や強さの訓練を示したものであることは、若干の人々から行き過ぎだとか、習慣や恥ずかしさに反するとされたとしても、識者には明白であって、そのとおりである。ともかく、偏見にとらわれない者にとって、それは健全な習慣に決して反するものではなく、われわれはそこに、女性の身体に力とすがすがしさを与える女性の体育をみたのである^{※10)}。

当時、すでに圏体育祭においても、女性体育会や女性体育部会の会員が、演技を公開しているという報告がある^{※11)}。

後に述べるように、クレフェルトの体育教師M. ツルム女史^{※12)}は、このような時代的背景と、女史が創刊した雑誌『ドイツ女性体育誌』を足がかりにして、女性体育の代弁者として活躍を始めていた。

他方、ドイツ体育会の内部にも、これまでの連盟の態度を批判し、女性の体育家に正当な地位を与え、女性の体育を促進しようとする有力な体育家が現れ始めていた。

20世紀初頭のドイツ体育連盟が当面する一つの重要な問題は、女性の体育に対する連盟の姿勢の

表明であった。

2. ドイツ体育連盟における女性体育をめぐる論議

ドイツ体育連盟は、連盟の女性体育の発展には喜びを示していた。1902年の年次報告の中でもはっきりと、「女性の体育の躍進はまことに喜ばしいがぎりである。まさしくそれは、男性の体育と同様に、祖国の健全な将来のために大切なことである……^{※13)}」と表明している。

このことは、ドイツ体育連盟が当初から「体育を全国民の共有財産にする」ことを最終目的としていたことから、当然のことである。

しかし、連盟は女性の体育の躍進には「正しい限界を置き、遊び半分や見せ物の類のうすっぱらな物になることを避ける……^{※14)}」必要があると考えていた。

ここにいる女性の体育の限界とか、うすっぱらな女性の体育などというのは、一体何を意味しているのだろうか。

女性の体育に対する連盟の姿勢が初めて明確に示されたのは、1903年のニュールンベルクでの中央委員会においてであった^{※15)}。

この委員会では、体育会の女性の体育について、以下の3つの議題が提出されていた。

1. 女性体育の組織に対する連盟の態度（委員会提案、報告者、ゲッツ）
2. ドイツ体育祭への参加とその範囲（委員会提案、報告者リュール）
3. ドイツ体育連盟における女性部会所属者の会員権を認むべきこと、及び女性部会の所属者は統計調査において徒弟者と同等とみなす、すなわち体育会の所属者とするということ第13体育圏（チューリンゲン）の体育総会からの提案（報告者ベトマン及びリュール）

上記1は2と3の内容を含むものであるが、3つの議題をめぐる、7月17日の委員会では白熱した論議が展開されたが結着がつかず、小委員会で作成し、翌18日にやっと中央委員会見解をまとめることができた、というほどであった。

まず提案1に対して、連盟会長であり報告者であるゲッツは、長時間にわたって女性体育についておよそ次のような状況分析をした上で、7項目の問題提起をしている。

ゲッツの分析によると、近年女性の体育は目覚

ましい発展をとげているが、これらはまことに喜ばしいことである。そして、女性の体育に一定の組織的基盤を与えるべきだという声が各方面から出て来ている。この声の中には、若干ではあるが、現代の解放を求める女性運動と呼応して、ドイツ体育連盟の中で、男性と同等の組織や権利を認めるべきだというものもある。女性体育家の先頭に立つマルタ・ツルムは、女性からも会費を取り、彼女らを祭典に招き、統計調査の対象にすべきであり、女性をニュールンベルクのドイツ体育祭から閉め出すのは理解できないし、とりわけ体育連盟に属さない女性体育家に対する保護と指導の欠如は最悪の罪であると主張している。

しかし、ゲッツによると、一般的には、現今の形式で女性の体育が被害をうけているという証拠は何もなく、反対に、女性の体育が発展している現状は、女性がいう厳密な組織が必要だということを示唆するものではない。むしろ、ハンブルクやライプツヒヒやシュテッテンのように、女性の体育が発展している所では、男性と同等の権利を求めている。そして、ドイツ体育祭への女性体育家の参加を禁止したのも、女性体育のすこやかな発展を願ってのことである。つまるところ「婦人は家庭のために在り、男性は社会のたけに在る」(die Frau fürs Haus, der Mann für die Öffentlichkeit!)のである。

そして、ゲッツの提案とは、およそ次のようなものであった。

1. 女性の体育は、第一に衛生的観点から、健康によい重要な身体訓練で、体力と技の促進及び楽しく若々しい活動への機会とみなすべきものである。

2. 女性体育の正しい実践と健全な発展のためには、ドイツ体育連盟の体育会へ外部的に結合するのが、最も簡単で最も具合が良い方法である。

3. ドイツ体育連盟の体育会内部への女性部会の完全な吸収、つまり同じ権利と義務を持った会員として認めることは、どんな状況の場合でも、保護を要する女性の特性にふさわしくなく、女性体育の発展を阻害するだろう。そして、そのようなことを望んでいる女性部会は多くはない。

4. 女性部会の組織化や指導は、女性の年令や地位や仕事を考えると、各体育会の判断に委ねるべきである。

5. ドイツ体育連盟における女性体育のすべて

を扱う委員会の設置は、当面意味がないし、役にも立たないであろう。

6. 女性体育についての調査・統計は完全に実施すべきである。

7. 公開演技や体育会行事への女性体育部会の参加は、日常の女性の好ましい控え目な立場を考慮して、ごく僅なもの、徒手運動や手具運動に限定されねばならない。ある限界を越え、拡大することは、教養ある人々の女性体育観に致命傷を与えることになる。

提案2に対して、リユールは、ドイツ体育祭への女性の一般的な参加はきわめて害が多く、祭典開催地の女性だけが参加を許容されるべきだと提案している。

提案3に対しては、まずベトマンがおおよそ以下のような報告をしている。

これはもともと中部チューリンゲン地方(ガウ)による圏総会への提案であるが、提案理由は、各地に女性体育部会が結成され、幾つかの圏や地方はそれを促進している。ドイツ体育連盟が女性の体育を促進しようとするなら、連盟の会員とみなし、それにふさわしく扱うことが望まれるし、統計でも14歳以上の「所属員」として集計すべきである、と。

女性の体育に対する第3の提案については、女性の資格をめぐる激しい論議がくり返されたが、ベトマンが女性部員を正規の会員とはせずに体育会所属員とみなす、と変更したことによって、委員会の大勢はこの方向にほぼまとまった。

また、体育祭への女性の参加についても、地元の女性にのみ参加を認めることで、共通理解に到達した。

しかし、連盟は、これらの問題だけでなく、女性体育そのものに対する基本姿勢の表明を、マルタ・ツルム女史から求められており、それに応える回答の作成を、ゲッツを長とするリユール、パルチュ、アツロット、シュレーター、シュムックの臨時小委員会に托することになった。

この小委員会が作成し、ドイツ体育連盟中央委員会で認められた女性体育に対する連盟見争とは次のようなものであった。

1) 女性の体育は衛生的観点から、健康的で大切な身体訓練であり、体力と健康の促進及び生き生きとした活動の機会とみなすべきものである。

2) 女性の体育の正しい実践と健全な発展のた

めには、女性体育がドイツ体育連盟の体育会に結合されるのが、最も簡単で最も容易な方法である。

3) 女性が男性と同じ権利と義務を持つ体育会の会員になることは、今日の社会の状況にふさわしくなく、むしろ女性体育の促進と拡大を阻害するだろう。

4) 体育会による女性体育部会の設立や指導は、専門的な知識をもった男女の指導者によることが望ましい。

5) 『女性体育誌』上に示されている、統轄的な女性体育委員会をドイツ体育連盟内に設置することは、当ドイツ体育委員会としては目下のところ女性体育の促進になるとは考えない。

6) ドイツ体育道盟の調査では、女性の体育を十分調査すべきである。

7) 女性体育部が公開の場に出る際には、外的な振舞いでも、運動の選択でも、女性にしつけられた限界を厳しく守るべきである。

これは、先に示されたゲッツの見解と同一であり、これまで連盟が女性体育にとってきた態度をまとめたものであって、女性体育促進者の意向はほとんど無視されたものであった。

委員会の決定に従って、ゲッツ、ハーン、パルチュの3委員が、この見解をもとに、マルタ・ツルム女史と話し合うことになった。

女性体育家の代表とドイツ体育連盟の代表者との会合は、同1903年7月22日、ニュールンベルクで開催された。

この会合は、公式報告書によると¹⁶⁾、ほぼ100人ほどが出席して、22日の午前9時45分、マルタ女史の開会の挨拶で始められ、議事の進行は議長パルチュ教授のもとで行われ、書記にはノイエンドルフが選ばれている。

冒頭パルチュ教授は連盟の7項目見解を示してその真意を述べ、特に、女性部会を体育会に設置することと、男性と同じ権利を持つことは女性体育の利益にはならないことの2点を強調している。

これに対し、ツルムは特に第2の点に反論し、この委員会見解は大部分の女性の見解とは異なることを指摘し、女性に審議権を与えるべきことを強調している。彼女によると、女性体育家の多くがまだ未成熟であるというならそれは男性にもあてはまることである。当面われわれにとって重要なことは、会員権の問題よりも、特別な女性体育

審議下部委員会の設置と、現存する委員会への参加である、と。

ここでゲッツはくり返して、女性が男性と同じ権利を持つことは、女性体育にとって利益にならないこと、「女性の体育は、女性の社会運動と同様に、控え目で注意深く扱わねばならない。」ことを強調している。

ツルムが女性体育の審議機関を重視していることを示唆したので、議論はその方向に向かい、現存委員会に女性委員を入れる意見と、特に、女性を入れなくても審議は可能であり、変更不要とする意見が出されている。

これに対しツルムは、一方では一般的である小さい体育会における女性体育指導力の欠如の現状から、他方では連盟の中央委員会の多忙の現状から、女性体育を専門的に検討する中央委員会の下部委員会設立が必要だと主張している。

ここで会議は、7項目についての個々の検討に移った。

第1項目については、意見が出なかった。

第2項目については、議論が多く出ているが、分類すれば、小さい体育会の女性や女性体育会からの、女性が連盟の会員にならない限り、女性体育の発展は困難であると主張と、女性に同じ会員権を与える時期ではないという主張の2つであった。この討議は、パルチュが連盟見解を説明して締めくくられている。

第3・4項目についても意見が出ていない。

第5項目に関しては、女性体育については指導や教材や公開演技への出場等多くの問題があるので、しかるべき審議の場を持つことが大切であるという考えが主流を占めていた。

第6項目については特に議論はなく、第7項目については、地元の公開演技に出場するのは、女性体育の発展にとって好ましいが、他の地域での祭典めぐり、従ってドイツ体育祭への一般的参加は、婦人や少女にふさわしいとは考えられないというのが主流であった。

この会議は、ツルムの連盟への感謝と連盟の女性体育家への協力の挨拶をもって、11時45分に終了した。

初めて開催された連盟と女性体育家とのこの討議は、女性体育家の要望が、女性の社会運動を背景にして、平等の会員権の取得にあるが、当面審議の場を求めることに重きを置いていることが明

らかになった点で、また、連盟が女性体育部会の設置を最優先し、会員権は認めないこと、祭典の公開演技参加は地元女性にのみ認めていること、とりわけ女性体育の促進には協力的であることが明確になった点で、双方に有意義であったと思われる。

1904年のドイツ体育連盟総会では、第8 b 体育圏（ヴェストファーレン＝リッペ）から、a. 女性体育部会が男性体育部会から独立している地域及び独立女性体育会がある地域では、女性体育の技術的促進のために、地方（ガウ）組織に組み入れる、但し会員としての投票権は認めないこと、b. 体育委員会に特別女性体育委員会を設置することを決議するよう提案されている¹⁷⁾。

前年度の中央委員会で、女性体育家の権利の容認や委員会の設置に積極的であったのは、2つの圏であったが、この総会では4つの有力圏が賛成しており、総会においても、中央委員会の見解で納得させることは出来ず、中央委員会での継続審議となった。

しかし、ドイツ体育教師連盟の動向や¹⁸⁾、ノイエンドルフのような次代のドイツ体育連盟をになう有力体育家の発言からも¹⁹⁾、女性体育の地位の認容は時間の問題であったといえる。

このようにして翌1905年の中央委員会で、早くも、体育専門委員会の提案に基づいて女性体育の問題を討議した結果、優秀な女性体育家を中央委員会の体育専門委員会に招き、女性体育について検討を始めることを決定している²⁰⁾。

他方この時期、ドイツ体育連盟の女性体育に関連して、一つの重要な問題が生じていた。それは、1860年代から厳しい闘争をくり広げてきたスウェーデン体操の問題である。

スウェーデン方式の体操は、平行棒論争以後、ドイツの体育会及び学校ではひとまず後退し、主に軍隊の中で実施されてきたのであるが、女性体育の台頭とともに、主に学校において、そして治療の領域でも行われるようになり始めていた。

ドイツの体育界、いや世界の体育界で最大の勢力を持った集団と自負していたドイツ体育連盟としては²¹⁾、ドイツの女性体育への批判勢力として登場してきたスウェーデン女子体操に対して、論争の結着をつけるためにも²²⁾、連盟の態度を表明せねばならなかった。

この問題は1905年春の連盟の体育専門委員会で

討議され、その原案をもとに同年夏の中央委員会で検討の上まとめられて、公示された。

この『女性体育とスウェーデン体操』と題されている連盟公示は、直接的にはドイツのスウェーデン体操派によるドイツ女性体育批判に応じて作成されたものであるが、これまで問題になってきていた女性体育の内容や方法に対する連盟の具体的回答を示すものとしても、重要な意味をもつものであった。

そのおよその内容は以下のとおりであった²³⁾。

A 女性体育の促進について

a 連盟は、女性の体育を単純で、力強いものに作り上げてゆくことが大切だと考えている。

b. そのためには、秩序運動を必要に応じて制限すること、技巧に富んだ歩行やジャンプを制限すること、ただし女性体育のぬらいとして優美な技は重視すること、力強い腕・軀幹運動を重視すること、走運動を度々実施すること、亜鈴、棒（木と鉄）、棍棒等の手具運動を重視すること、他の運動形式と同じ価値があるものとして器械運動を十分に利用すること。

c けんすい、支持、跳躍の運動用具として、1) 回転ブランコ、2) リング、3) 垂直・斜・水平梯子、4) 垂直・斜棒、5) 自由・混合跳躍の用具（跳躍柱、跳躍・ふみ台、小とび箱、低跳躍木馬）、6) 平均台、7) 鉄棒を推薦する。

d. 跳躍の指導には特に留意し、要求度を制限し、軽やかな弾力的な踏み切りと着地に慣れることを強調すること。

e. 鉄棒と平行棒では慎重さに留意し、易から難へ確実に進めること。

f. 短距離走や遊戯は、できるだけ戸外で実施すること。

g. ズボンの上に、ひざの上部までの上着。

h. 招待客や体育会所属員の前での公開演技は、女性の体育促進に寄与するが、公開演技への出場には特に慎重さと注意が要望されること。

B ドイツの体育活動へのスウェーデン方式の導入について

ドイツの女性体育が女性の健康を考慮してお

らず、無益な遊びであるという見地から、幾つかの都市でスウェーデン体操の導入が行われている。

当委員会は、正しい取扱いがなされ、適切なしくみのもとで実施されれば、ドイツ体育がスウェーデン体操より優れていると考えている。教材の豊富さと多面的な教育価値の点で、また刺激的な活動方法の点で、ドイツ体育は身体的行為の精神的支配を目ざし、運動の喜びを高度に高めるものである。従って、ドイツ体育へスウェーデン体操を混入させたり、それで置き換えることは、断じて拒否せねばならない。もとより、良い点があればそれを拒否するものではないが、学校体育へのスウェーデン体操の導入に関しても、同様に考える。もしドイツの青少年の体育に問題があるとすれば、それは外的諸条件に帰因するものであり、当委員会は、学校体育の促進のために、時間の増加、施設、用具、クラス人数等の外的条件の改善、指導者の徹底した専門的養成や体育への献身等を期待している。

この連盟見解は、Aにおいては、女性体育のねらいを優美さと健康から力や技に広げたこと、教材に関して秩序運動や器械運動と特に戸外の民族的運動を重視していることなどで、当時の女性体育促進者の考えに接近しているが、公開演技への地元女性のみ参加という点では、これまでの見解を出るものではなかった。

またBにおいては、ドイツ体育を改善することで、スウェーデン体操の侵入を防ごうとする点で、これまでの連盟の方針や大部分の体育家の主張にそったものであった。

3. 世紀移行期の女性体育の諸問題

ここで、世紀移行期のドイツの女性体育家が直面していた問題について述べておこう。

20世紀に入ると、ドイツ体育連盟においても、女性体育改革の論議が展開される。そして、この論議は社会の変動との関係で論じられるようになったこと、男女平等の会員権にかかわっていたこと、女性の体育実践の具体的な内容に立入ったこと、体育の服装問題が特に取上げられていた点に特色があった。

ノイエンドルフは、社会の変動にともなう女性教育の拡大と女性の自立との関係で、女性体育会

を連盟に加入させること、体育会の組織に女性体育専門委員会を設置することを主張している^{※24)}。

ここで特に留意せねばならないことは、女性体育の改革を求める人々の多くが、民族闘争→富国強兵→頑健な母親→女性の体育、あるいは、産業の発展→都市化→生活の変化→頑健な母親→女性の体育という「健母主義の体育」の論理を主張していたことである。

1900年の初頭に限っても、個人では、ツァンダー^{※25)}、ディーボー^{※26)}、クリーグ^{※27)}、キュッペルス^{※28)}、プルガス^{※29)}、ヴェーデ^{※30)}等々、あげれば限りがない。

プロイセンのベルリン国立体育学校長ディーボーは、『女性体育の促進について』と題する論文の中で、「体育は、個人と国民の生存闘争における自衛の重要な行為である。民族の力はその市民の力と健康に依存する以上、身体の退化は国民の衰退・滅亡への第一歩である。ところで、国の多くを構成しているのは女性市民であり、彼女らの身体の鍛練は、この意味からだけでも無視することは許されない。……女性は母親であるだけでなく、次の世代の者の最初の教師である。虚弱な母親の体では生れてくる生命に生氣にあふれた力を与えることはできず、病気がちの母親による気の小さい育て方では、可愛い子供に大切な持久力を与えることはできない……。したがって、今日、女性の体育の必要性について異議をとる識者はいない……。ドイツ体育連盟も女性の体育に協力することを課題としている。」と述べ、女性体育促進のための具体的方策を示している^{※31)}。

会員権に関しては、連盟会長ゲッツに代表される否定の方針に対して^{※32)}、ノイエンドルフを代表として肯定勢力の力が、次第に大きくなってきていることがわかる^{※33)}。

女性体育の具体的問題に関しては、広範囲に論じられているが、1895年オイラーは、それらを以下の8項目にまとめている^{※34)}。

1) 指導者の問題 女性指導者が女性の特性をよりよく理解しているので、女性が適しているという説と、指導力は男性が高いので、男性の監督下で女性が指導するのが良いという説と、能力が高ければ性にこだわらないという説があるが、全体的にみると、「……男性体育教師は原則的に女子の体育授業からはすべて閉め出されている。」

2) 体育必修化の問題 全体的にみると、女子

の体育は必修化されておらず、一部には、年長になると授業は止めるのがよいという説さえあるが、アンゲルシュタインが言っているように、「子供の時から成熟するまでしっかり体育をした婦人は、健康な子供の母親になるだろう。」

3) 体育服装の問題 特別な体育服を着なければ出来ないような運動は、女性には不適であるという考えもあるが、一般には、運動にじまにならない服装が必要であると考えられている。つまり、コルセット等の胸・腰を締める物の除去、ピン類の一扫、幅が広くかかとかが低い靴、短い服。

4) 施設の問題 女性らしさの点から、体育館に限るという説もあるが、健康の点から、遊戯にかぎらず戸外で行うのが好ましい。

5) 教材の問題 女性体育の教材としては、動きの美しさも大切であるが、しかしそれは動きのエネルギーを結合しておらねばならない。そこで、低い年令では歩行や腕・脚・胸の運動などの基本運動を力強く行うことが大切である。女性の体育では、ピアノやバイオリン等でライゲンを行うことが特にすすめられる。

器械体操については意見がわかれているが、正しい指導で危険は避けられるし、全身を健康で力強くし、抵抗力を高める器械運動を実施すべきである。

従って、女性の教材の主領域は、ライゲンを含む徒手・秩序運動と、手具（木や鉄の棒、ボール、輪、亜鈴）と器械（跳躍、平均台、梯子、鉄棒、平行棒、リング、シーソー、登棒、その他）による運動を含む。

6) 指導の方法の問題 最近指導の方法に関して、多くの人々が理論を出しており、様々な見解があるので、例えば、体育の授業は何年生から始め、どのような教授課程に基づくかを示すことは困難である。教材の配当は可能であり、器械運動を低学年から除去する必要はないであろう。

授業形態は教師による学級授業を基本とするが、上級生では班別授業も意義がある。上手な生徒に示範をさせること、多くの者が一度にできるような用具を豊富に備えることも大切である。

7) 自由体育、女性の体育祭、体育遠足、体育遊戯等の問題 女性に対する体育効果の点で、安全な方法で自由体育を置くことは大切である。どのような観衆の前でも女性の体育祭を行うということは、断呼禁止されるべきであり、招待した

父兄等の出席のもとに実施すべきである。

体育遠足、つまりヴァンデルングは好ましいものであり、競走や遊戯を含めて実施するのがよい。

先生の指導下で行われる体育遊戯は広く行われるようになってきており、好ましい。

スケートも水泳も女性の運動として、きわめて好ましい。

8) 成人女性の体育の問題 学校を卒業した女性が婦人になっても体育を続けるようになってきたのは、現代の好ましい現象である。

これは19世紀末のオイラーの分析であって、項目そのものは当時の女性体育の問題点をほぼすべて取上げているが、教材の項で遊戯の問題を扱っていない点や、体育祭の女性参加否定の点などにも明白のように、それまでの連盟内の多数派の見解を示したものであって、新しい改革派の少数意見には重点を置いていないとみてよからう。

20世紀初頭の女性体育の中心的な理論的・実践的指導者であったK.ヘスリンク女史は、1902年に行った『女子生徒並びに卒業後の女子の体育』という講演の中で、当面する女性体育の問題点を取りあげ、およそ次のような見解を示している^{註35)}。これは当時の女性体育に対する女性指導者側の代表的な考え方を要領よく述べているだけでなく、当時の女性体育の実際を具体的に理解する上で重要な内容を含んでいるので、少し詳しく紹介しておきたい。

最近女性の体育が目覚ましい発展をみせてきたが、それは体育が女性の身体健康や体力の発達に良い影響を与えるというだけでなく、実行力、決断、勇気、持久力、労働の喜び、共同体精神、自由な服従、美への喜び、ふらちな事の拒絶といった道徳性の獲得に有益だということを、人々が認識してきたからでありましょう。

従って、体育は学校的女子生徒だけでなく、卒業した後の女性にも大切であります。

そしてまた、それ故にこそ、それにふさわしい活動の仕方が大切となります。

まず教材の正しい配分が大切で、徒手運動は全学年で行われ、器械運動は2年生から始められ、遊戯は特に小さい時に重視されて、全学年にわたって実施され、また秩序運動のライゲンも全学年にわたって行われます。

全学年にわたって最も大切なことは、体育の基本を身につけさせることであり、従って良い

姿勢や動きの軽やかさを身につけねばなりません。同様に正しい走運動も大切です。

女性の体育では楽しさと静かさが大切です。両方が女性の生活にとって大切な準備となりますでしょう。

これは多くの反対者がいますが、低学年の生徒に余り厳しい運動の正確さを要求してはいけません。子供達が喜んで自分から運動に取り組むようにさせることが大切です。基本さえしっかりやっておれば良いのです。

体育では美しさや軽やかさだけでなく、力をのばし、運動能力を高めることが大切ですから、器械運動を無視してはいけません。

運動はできるだけ一斉にやるのが良いので、器械が4個しかない場合は、4列を作り、1列目が運動し、2列目が補助をし、3列目はすぐに交替できる準備をし、次の列からは座って待ち、「つぎ!」という号令で一斉に交替するのがよいでしょう。時間をむだにしないといけません。生徒を怠屈させないように、できるだけ運動させることが大切です。

運動に関しては、女子の運動技能を高めて、それに喜びを持たせることに注意せねばなりません。

私たちの所（ベルリンの高女とゼミナール）では、ズボンとひざ上までのドレスという体育服を着用しており、合目的です。

全員を同じように形成するという点だけでなく、美しさや安全の点からも、また、管理上からも学級体育が好ましいし、効果的です。

一つひとつの運動をまず説明し、示範した後、力強く単純な号令で、しっかりと何回も連続的にやらせて、力をつけねばなりません。もちろん、やり過ぎは避けねばなりません。そして、最後には全員が一斉にやれるようにします。

号令は単調にならないように、アクセントをつけて、生徒に号令をかけさせてやるのもよいでしょう。器械運動でも号令でやるができます。また音楽による指導は、授業の楽しさを大変高めて効果的です。

また、一つの部屋での授業は一つの学級だけが行うように努力せねばなりません。

先生の指導の調子は重要な意味を持っており、生き生きとして、楽しさにあふれていること。はきはきとすることも大切ですが、金切声

は女性教師らしくありませんので、注意すべきことです。

先生の人格は決定的です。女教師は力強く、注意深く、友好的で、寛容で、体育に熱心で、生徒に愛を持っていなければなりません。

発声の練習、模範的な振舞い、良い目を持っていることも大切です。

それらによって、女先生と女生徒の間に愛と専門的な交流が生まれ、成果が高まります。

体育演技では、高い技よりも、みんなができる運動を行うことが大切です。表面よりも内実を大事にすべきです。

大都市の女子の体育遠足は有意義ですが、安全と翌日に疲労を残さないこと、歌や遊戯や登運動なども交えて、秩序を保ってやる必要があります。

卒業しても学校の体育で学んだことを維持し、体育によって健康を維持・増進することに喜びを持ち、さらに身体の力とたくみさを増大し、美しさを増し、勇気、決断、実行力を高めるべきです。そして婦人となっても、彼女自身が共同体の一員と感じ、与えられた命令に直ちに喜んで服従することに強い満足をもつようになるべきです。

従って、継続教育としての卒業後の体育では、学校で学んだ運動の基本的要求にさらに正確性を与え、持久性と力強さを求め、器械運動での難度を要求し、新しい運動の領域を広めること、一層道徳的なふん囲気で活動することが大切となります。

短かい秩序運動、変化に富んだ徒手運動、行進移動、それから、遊戯ないしはライゲン、最後に歌または音楽での簡単な行進が、婦人の体育の構成です。

こうして、真・善・美を求める有能な生存のために戦う女性が形成されましょう。

以上によって、われわれは、1900年代に入ると、健母主義に基づいて「女性体育の改革」が広く論議されるようになったこと、この改革で取上げられていた問題の一つは、女性の会員権の認可であったこと、他の一つは女性体育そのものの問題であったことを知ることができる。

この第二の問題に関しては、対象が児童・生徒から婦人にわたる全女性に拡大されていたこと、女性体育の目的が個人の優美さや巧みさから力や

意志や集団意識にまで及んでいたこと、教材が民族的運動や遊戯や行事的運動や器械にまで広がり、その配列が問題にされていたこと、方法が学校＝学級、社会＝斑別の体育とされ、女性の特性に応じて指導法の理論化が要望されていたこと、そして、徒手・秩序運動から入って、器械に移り、最後に遊戯という授業構成が、好ましいと認められていたこと、多様な運動に適した服装が広く問題にされていたこと、施設については体育室中心から戸外施設の重要性が主張され始めていたこと、指導者については、女性体育は女性の手によることが常識となってきたことなどを知ることができる。

さらに、女性も学校では体育の基礎教育を、社会では継続教育をというシュピースの問題提起が、20世紀に入って、つまり男性から50年遅れて、やっと女性体育でも容認されてきたことに注目すべきである。

4. 女性体育家の会員権の容認

女性体育促進者側が要求していた事項の中で、女性体育問題を討議するために、女性体育専門委員会を設置する件に関しては、すでに述べたように女性専門家を連盟の体育専門委員会に招くという決定が1905年の連盟中央委員会で容認されていた。また20世紀に入ると、ツルムを先頭とする女性体育家側からも、ノイエンドフを先頭とする体育会有力者や体育組織からも、女性を体育連盟の会員ないしは所属員に認めるべきだとする声が、次第に強くなってきたことについても、すでに述べたとおりである。

1906年7月の中央委員会で、前年度の委員会で作成され、同年機関誌DTZ、第42号に公示された『女性体育とスエーデン体操』をめぐる、早くも新らしい提案がなされ、再度激しい論議がたたかわされている。

この新しい提案は、1906年4月にフランクフルト・アム・マインで開かれた体育専門委員会と圏体育部長との合同会議に、マルタ・ツルム女史を招き、きわめて激しい論争の結果作成されたものであった³⁶⁾。そして、その第1項は、女性体育部会が、地方(ガウ)体育連盟ないしは圏(クライス)体育連盟へ加入することを認めている点で、新しかった。

I 女性体育部が、当該地域にあるドイツ体育

連盟所属の男性体育会に所属するのが、最も簡単で最も実行可能な方法である。これが不可能な女性体育部は、その体育活動を促進するために、地方(ガウ)または圏(クライス)に組入れることができる。その決定権は圏体育委員会にある³⁷⁾。

争点は第2文節にあった。このままでは女性体育部や女性体育会の正式加入が認められ、会員権が生じるからである。真先にゲッツが反対し、ハーンを除く他の委員も、その方向にまとまった。その結果、下記のパルチュの改正提案が認められ、正式加盟ないし会員権は拒否されることになった。しかし、後で述べるように、実質的には体育会に所属しない独立女子体育会を圏や地方の連盟でどう処理するかは、それぞれの委員会にまかされていたとみてよい。

男性体育会への加入が不可能な女性体育部会は、女性体育を促進するために、当該圏、地方及び地域体育会の行事に、招待客として参加することを許可される。

第2項は、女性体育家の代表を圏や地方の委員会討議に参加させる件を規定したものであった。

II 女性体育の諸問題について、圏や地方で検討するために、所属女性体育部会の女性代表も、呼ぶことが望ましい。

論議では、連盟に所属する女性体育部会の代表を確認した後、「……女性体育に精通した女性代表も……」を挿入することになった。

第3項は、女性体育の指導者養成に関する項目であった。

III 女性体育を促進するためには、女性体育部会の男女指導者の養成が無条件に必要である。圏ないし地方で適切な講習会を開催することを強く勧告する。この講習会は長期間を要し、可能な所では体育に精通した医者呼んで開催せねばならない。

指導者養成の急務は一同認めるところであったが、問題は最後の文節の強制的な性格にあった。討議の結果、実状を考慮してその文節は除去された。

第4項は、体育服の規定であった。

IV 体育服は目的になっているのがよい。コルセットやその他呼吸と自由な運動を妨げるすべての服装を身につけてはならない。なお紺色のズボンの上に紺色の膝上までの上着を

着ることが強く要望される。足にはかかとがない心地良い靴ないしは低いかかとのものをはく。

色や上着などについて若干意見が出ているが、この項目は改正されずに認められた。

問題は第5項の体育祭への女性の参加の問題にあった。

V 招待客と体育会所属員の前での演技体育は、女性体育の促進に寄与する。公衆の前に出る時はいつでも、深い慎しみと注意が必要である。体育祭での演技は、つねに上述の服装で実施する。圏及び地方体育祭では、女性体育の領域での体育の催し物は、まずその地域の女性体育部会が実施するのが望ましい。女性体育のために外の女性体育部会を呼ぶ必要がある場合は、それを拒むものではない。祭典行進への女性体育部会の参加は認められない。

外部の女性体育家の参加を、例え招待であれ認めた点で、当初よりは妥協したものといえよう。その結果、次回フランクフルトでのドイツ体育祭には、広範囲の女性が参加することになった。ともあれ、女性の会員権問題が第1項で否定されているので、祭典への参加では論争の余地は残されておらず、4項と矛盾するという意見で、体育服の文節を除いて、この条項はそのまま承認された。

この女性体育の促進に関する条項審議の過程で、ドイツ体育連盟における女性体育の争点で、つまるところ会員権にあることが明らかとなった。

ドイツ体育連盟会長ゲッツは、『「ドイツ女性体育誌」への回答³⁸⁾』という形式で、上述の中央委員会の女性体育の決定事項に対するマルタ・ツルム側の「……僅かな前進……」とする批判や、「体育会の中で女性体育家に同じ権利を要求」している彼女らの動きに対して、激しい非難をあげている。彼によると、このような連盟の女性体育への援助に、彼女らは「……膝まづいて神に感謝すべきであった。」し、「婦人はただひたすら真じめに体育をすべきである。」そして、「女性体育の健全な活動というものは、同じ権利とか他の立派な事柄などとは全く関係がないのだ!」。

けっきょく、1907年7月29日のヴォルムスにおけるドイツ体育連盟総会で、中央委員会提案の女性体育に関する連盟の基本方針は、第4項の「な

お紺色の膝上までの上着を着ることが強く要望される。」という文節を除き、最後に「ドイツ婦人服改良協会」(会長F.ゲッツ嬢)からの提案を付け加えただけで、そのまま認められた³⁹⁾。

本総会は、ドイツ婦人服改良協会から推薦されたライプチヒ、ケムニッツ、ベルリン、ケルンの女子体育服に留意するものである。

中央委員会で女性体育家の会員権問題が重ねて討議されたのは、1910年7月のシュトラスブルク会議であった⁴⁰⁾。この時には、第3b体育圏(ブランデンブルク圏、ベルリン市を含む)から、独立した女性体育会をドイツ体育連盟に加入させる件が提案された。

この提案をめぐる討議でわれわれの関心をよぶのは、加入は実質的に各圏・地方連盟にまかされており、すでにある圏では、男性と同様に会費をとって、加入させているという事実である。

さらに、最近の女性体育の急激な発展に対応して、連盟の女性体育の方針の見直しを求める委員(事務局長リュールら)と、変化を認めようとしないう委員(会長ゲッツら)の勢力が、相半ばないし、逆転してきているという事実である。

論議の途中で、ベルガー委員から、「当委員会は、次回ドイツ体育総会に、独立した女性体育会をドイツ体育連盟に加入させるよう提案し、加盟の諸条件についての詳しい提案を体育専門委員会に作成させることを議決する。」という案が出させた。

この案をめぐることは、加入は男女会員の同権を認めるので反対という主張も強かったが、議決ではベルガー案が認められ、なお、年次統計調査において、独立した女性体育会を調査することも決定した。

ドイツ体育連盟における女性体育の問題については、1911年の第15回ドイツ体育総会こそ、最も重要な意味を持つものであった。

この総会での女性体育の議論の中心は、会員権及びそれに付随する義務と祭典への参加にあった⁴¹⁾。激論の末ではあったが、改革派の主張がほぼ通ることになった。注目すべきことは、全員権が「きわめて多数で受け入れられた。」という事実である。

この決定は直ちに機関誌に公示された⁴²⁾。

ドイツ体育連盟

第15回ドイツ体育総会の議決に基づいて、順守並びに速やかな実施のために、これを公示す

るものである。

.....

3) 「独立した女性体育会を、男性体育会と同じ権利・義務を持つものとして、ドイツ体育連盟に受け入れることを容認する。」

4) 「女性体育部会を持つドイツ体育連盟の体育会は、17歳以上の女性体育家が完全な地方(ガウ)、圏(クライス)、地域体育会の会費を納入した場合、彼女らを会費納入会員、ないしは投票権の数に入れる権利を持つが、強制されることはない。」

5) 「圏・地方体育祭の祭典行進に女性体育家が参加することは、圏・地方指導機関の決定による。ドイツ体育祭の祭典行進や競技体育への出場は、許されない。」

「祭典行進への参加は統一的な体育服を着た女性体育部会にのみ許される。」

.....

1911年11月1日ライブチヒとシュテツチンにて、ドイツ体育連盟会長・枢密衛生顧問官ゲッツ博士、事務局長・公立学校顧問官リユール教授・博士

おわりに

以上によって、われわれは、19世紀の末から20世紀の初頭にかけて、ドイツ体育連盟にかかわりをもつ女性体育が台頭し、女性体育の問題が論議されるに至ったこと、この世紀移行期の女性体育の問題は、きわめて多岐に渡っていたが、大別すると、女性の体育実践に直接かわる諸問題、例えば、教材・指導法・施設・服装・指導者等の問題と、会員資格(会員権)にかかわる問題であったこと、そして、その会員権の問題は、当初連盟内で強力に拒否されていたが、女性の社会運動という時代背景のもとで、先進的な女性体育家の主張とこれに応える有力な男性体育家の協力体制で、連盟内部に論争が生じ、当初・地域体育会や地方(ガウ)体育連盟や圏(クライス)体育連盟の自主判断で容認され、最終的には、1911年の連盟総会で容認されたことを明かにすることができた。

参考文献

- 1) Die neunte deutsche Turnlehrerversammlung zu Berlin am 7. bis 9. Juni 1881. DTZ. 1881. Nr.

30. S. 325-330.

Peter: Das Turnen der Mädchen. DTZ. 1881. Nr. 12. S. 103-104.

K.Vogt: Betrachtungen über Mädchenschauturnen. DTZ. 1883. Nr. 24. S. 265-267.

Antwort des preussische Cultusministers auf eine Petition, das Mädchenturnen betreffend. DTZ. 1883. Nr. 35. S. 424.

Petition des Vorstandes Vereins für Körperpflege in Volk und Schule zu Bonn an Se. Excellenz den Minister der geistlichen Unterrichts- und medizinischen Angelegenheiten, Herrn von Gossler in Berlin. DTZ. 1883. S. 204. その他1880年代には多くの女子体育に関する論議や請願がなされているが、それらの多くは学齡期女子の学校体育に関するものであった。

- 2) この問題については下記参照。

A. Ellfeld: Der Verein zur Förderung des Damenturnens in Berlin. Gründung und Thätigkeit in ersten halben Jahre seines Bestehens, vom Juni bis Dezember 1893. DTZ. 1894. Nr. 22. S. 411-412, Nr. 38. S. 760, Nr. 47. S. 920.

- 3) Encyklopädisches Handbuch. Bd. 3. 1896. S. 361
なお、下記参照。

Marx: Die erster 3 Jahre des Frauen-Turnvereins in Darmstadt. MT. 1897. H.2. S. 59-60.

- 4) Deutsche Turnerschaft. DTZ. 1896. Nr. 38. S. 779.

- 5) L. Schützer: Das Turnen der Frauen und Mädchen in den Turnvereinen. DTZ. 1895. Nr. 19. S. 393-397.

- 6) Verhandlungsschrift der Sitzung des Ausschusses des Deutschen Turnerschaft am 19. und 20. Juli 1896 im Hansasaale des Rathauses Zu Köln am Rhein. DTZ. 1896. Nr. 34. S. 707.

- 7) 1894年のDTZ誌上には、プレスラウの第8回ドイツ体育祭に関しては、報告及び回想・批判等を含めて13以上の論稿が出ているが、女性体育については論議されていないようである。

- 9) 主に次の報告を参照。

P. Erbes: Das neunte Deutsche Turnfeste zu Hamburg vom 23-27. Juli 1898. DTZ. Nr. 38. S. 785-789, Nr. 39. S. 805-807, Nr. 46. S.941-944, Nr. 48. S.985-987.

- 9) ebenda. Nr. 49. S.985.

- 10) Jahres- und Geschäftsbericht dem Ausschusse der Deutschen Turnerschaft und dem Deutschen Turntage erstattet in Naumburg im

- Juli 1899. DTZ. 1899. Nr. 32. S.712.
- 11) Spielvereinigung für Frau und Mädchen in Zweibrücker Turnverein. DTZ. 1895. Nr. 16. S. 335.
K.Schrötter: Übungsgruppen für das Turnen der Frauen und Mädchen. DTZ. 1898. Nr.25. S. 509.
 - 12) Thurm, Martha. in Handbuch. 1920. S.772.
 - 13) Verhandlungsschrift der Sitzung des Ausschusses der Deutschen Turnerschaft in Nürnberg. DTZ. 1902. Nr.33. S.712. Anlage I.
 - 14) ebenda.
 - 15) Deutsche Turnerschaft. DTZ. 1903. Nr. 27. S. 618. Verhandlungsschrift der Sitzung des Ausschusses der Deutschen Turnerschaft in Nürnberg. DTZ. 1903. Nr.32. S.733-736.
Deutsche Turnerschaft. DTZ. 1903. Nr. 1. S.2.
 - 16) Von zehnten Deutschen Turnfest in Nürnberg. I. Bericht über die von Fräulein M. Thurm veranlasste Besprechung bezüglich des Fraueturnens in Nürnberg am 22. Juli 1903. DTZ. 1903. Nr.36. S.832.
 - 17) XIII. Deutsche Turntag in Berlin. DTZ. 1904. Nr. 20. S.459.
 - 18) Deutscher Turnlehrerverein. Aus den Jahresberichten unserer Zweigvereine. DTZ. 1903. S.331-332.
Bericht über den 15. deutschen Turnlehrertag in Quedlinburg (vom 18. bis 21. Mai 1904). DTZ. 1904. S.934-936.
その他.
 - 19) E.Neuendorff: Fraueturnen. DTZ. 1903. Nr. 37. S.852-853.
E.Neuendorff: Fraueturnvereine und Deutsche Turnerschaft. DTZ. 1904. Nr.29. S.685-687.
Turnerschaft. DTZ. 1904. Nr.40. S.953-956.
その他.
 - 20) Sitzung des Ausschusses der Deutschen Turnerschaft in Königsberg i. Pr. am 5. und 6. August 1905.
DTZ. 1905. Nr. 35. S.611.
 - 21) 近代オリンピックへの対応の中で、このことが特に問題となる。
 - 22) この問題に関しては、下記論文参照, R.Heeger: Ob schwedisch oder deutsch? Leipzig. 1905.
Deutscher Turnlehrer-Verein. MT. 1905. H.6. S.188.
 - 23) Vom Ausschuss der Deutschen Turnerschaft. Fraueturnen und schwedisches Turnen. DTZ. 1905. Nr. 42. S.741.
 - 24) E.Neuendorff: Fraueturnen. DTZ. 1903. Nr. 37. S.852-853.
 - 25) R.Zander: Betrachtungen über das Mädchen-turnen und über die Fertigkeit der Turnlehrerinnen. DTZ. 1907. Nr.1. S.5-7.
R.Zander: Die körperliche Ausbildung der weiblichen Jugend nach Abschluss der Schulzeit. DTZ. 1908. Nr.1. S.5-8.
 - 26) P.Diebow: Über die Förderung des Fraueturnens. DTZ. 1908. Nr.20. S.361-364.
 - 27) Krieg: Über die Notwendigkeit einer Reform der Körpererziehung für das weibliche geschlecht. DTZ. 1910. Nr. 16. S.289-290.
 - 28) Küppers: Über die Grenzen des Fraueturnens. MT. 1899. H.1. S.1-8.
 - 29) Burgas: Welche Bedeutung beansprucht die Pflege körperlicher Übungen in der Fürsorge um die schulentlassene Jugend und wie ist derselben gerecht zu werden? MT. 1902. H.11. S.321-327.
 - 30) Weede: Volkstümliche Übungen, Spiele und Wanderungen im Turnen der weiblichen Schuljugend. MT. 1908. H.12. S.353-360.
 - 31) 26参照.
 - 32) 中央委員会での重ねての発言にもみられるように、ゲッツが反対の代表的存在であったとみられる。
 - 33) 24参照, この他ユーリッシュ, ヘーガー, カッペル, トイシャー, エッカルト, ラーデン, メツチュケ, ヘルマン, ヘスリンク, マイネッケ, レーマン等々の名前をあげることができる (DTZ. 1900-1910, MT.1900-1910参照)。
 - 34) Encyklopädisches Handbuch. Bd.2. 1985. S.96-102.
 - 35) K.Hessling: Das Mädchenturnen in und nach der Schule. MT. 1903. H.3. S.65-73.
 - 36) Bericht über die Sitzung des Turnausschusses und der Kreisturnwarte der Deutschen Turnerschaft am 10. und 11. April in Frankfurt a.M. im Vereinszimmer des Frankfurter Turnvereins, Sandweg 4. DTZ. 1906. Nr.18. S.326-327.
 - 37) 以下中央委員会の論議と決議については以下参照, Sitzung des Ausschusses der Deutschen Turnerschaft in Hildesheim am 28. und 29. Juli 1906. DTZ. 1906. Nr.35. S.675-676.
 - 38) Die Frau und der Ausschuss der Deutschen Turnerschaft. Ein Antwort an die "Deutsche Turn=Zeitung für Frauen." DTZ. 1906. Nr.42.

S.820-821.

- 39) 14.Deutscher Turntag in Worms am 28. und 29. Juli 1907 im städtischen Spiel-und Festhaus. DTZ. 1907. Nr.38. S.732.
- 40) Sitzung des Ausschusses der Deutschen Turnerschaft in Strassburg i. Els. am 22. und 23. Juli 1910. DTZ. 1910. Nr.36. S.683.
- 41) ベルガー案は1910年12月27-30日の体育専門会議で検討されたが、「加盟条件を検討する状態ではない」という見解から、会員権と義務及び祭典参加への討議内容をそのまま次回中央委員会に提示することになっていた。Bericht über die Sitzung des Turnausschusses der Deutschen Turnerschaft in Berlin in den Tagen vom 27. bis 30.

Dezember 1910. DTZ. 1911. Nr.6. S.101 -103. 参考.

中央委員会の討議については、Sitzung des Ausschusses der Deutschen Turnerschaft am 26. und 27. Mai 1911 in Leipzig. DTZ. 1911. Nr.26. S.483参照.

体育総会での討議については、15.Deutscher Turntag in Dresden am 27. und 28. Juli 1911 im Konzertsale des “ Zoologischer Gartens.” DTZ. 1911. Nr.35. S.650.なお、15. Deutscher Turntag. DTZ. 1911. Nr.31. S.584参照.

- 42) Deutsche Turnerschaft. DTZ. 1911. Nr.46. S. 853, Nr.47. S.877, Nr.49 S.913.